2025 年 8 月 27 日

ＡＬＡ・米国図書館研修参加報告書

東洋大学附属図書館　中山絵里

１．参加目的

米国図書館での施設見学および図書館員とのミーティングを通じて、以下の点について理解を深めることを目的とした。

① 収集資料媒体（冊子、電子、その他）の現状と将来の展望・方針
② 多様性への取り組み
③ 図書館員の専門性および業務意欲の維持・向上のための取組

２．研修スケジュールおよび参加者

日程	訪問先（所在地）
2025/06/26 (木)	ニューヨーク公共図書館（ニューヨーク、NY）
2025/06/27 (金)	ハンターズ・ポイント図書館（ニューヨーク、NY） ペース大学図書館（ニューヨーク、NY）
2025/06/28 (土)	ニューヨーク市内の施設見学等 フィラデルフィアへ移動
2025/06/29 (日)	ALA 年次総会特別セッション（ペンシルベニア・コンベンション・センター：フィラデルフィア、PA）
2025/06/30 (月)	ペンシルベニア大学図書館（フィラデルフィア、PA） ラトガース大学図書館（ニューブランズウィック、NJ）

参加者：大学図書館職員 2 名、図書館業務委託職員 2 名、図書館関係企業社員 4 名、
　　一般参加者 1 名
同行者：運営関係者 2 名、添乗員 1 名、通訳 1 名、現地ガイド 1 名

３．訪問記録

（1）ニューヨーク公共図書館（New York Public Library）[1]

ニューヨーク公共図書館（NYPL）は、米国最大級の公共図書館システムの一つとして知られている。本館は大階段、彫刻、天井画など芸術的な装飾を持つ伝統様式の建造物で、アメフトのフィールドほどある広々とした閲覧室、ニューヨークの歴史に関する資料や美術

[1] https://www.nypl.org/

品の展示、多様な媒体を含む貴重書コレクション[2]等を見学した。図書館員の他、館内設備の修繕専門スタッフや多くのボランティアスタッフも在籍している。1911 年開館当時の机や椅子等を現在も使用しており、壊れた際は修繕スタッフが同じ形のものを作り直すなど、伝統的な景観を大切にしつつ、無料 Wi-Fi や PC 用電源の供給など、時代に即した利用環境を整備している。

NYPL 全体では 92 の分館があり、移民の多い地域性に寄り添った多文化・多言語サービス、子ども・若者支援、地域性の高いイベント等、分館ごとに多様性に応じた支援プログラムを展開している。所蔵資料は 5,600 万点以上にのぼり、本館に隣接した地下書庫やプリンストン大学内の共同遠隔書庫「ReCAP」[3]を利用して保管されている。また 100 万点以上のデジタルコレクション[4]を公開していることに加え、利用者の利便性を考慮し、電子資料の収集にも力を入れている。

本館のすぐ近くに位置するスタブロス・ニアルコス財団図書館（Stavros Niarchos Foundation Library）[5]は、コロナ禍を経て 2021 年に全面改装された分館である。リサーチライブラリーである本館に対し、SNFL は市民のための使い勝手のよい図書館として機能している。一般書フロアの他、3 D プリンタやメディアスタジオ等を備えたティーン・児童フロア、就職支援を行うビジネスセンター、最上階にはイベントホールや眺めのよいテラスがあり、利用者の憩いの場となっている。観光客の多い立地ながら、サイレントエリアでは静謐な環境が保たれていた。

観光スポットとしても人気の高い本館外観

伝統的な景観の Rose Main Reading Room（本館）

SNFL 外観

設立当時からの形を維持する机や椅子（本館）

明るく親しみやすい雰囲気の館内（SNFL）

最上階のテラスからの眺め（SNFL）

[2] https://www.nypl.org/events/tours/audio-guides/treasures-audio-guide
[3] https://recap.princeton.edu/
[4] https://digitalcollections.nypl.org/
[5] https://www.nypl.org/locations/snfl

（2）ハンターズ・ポイント図書館（Hunters Point Library and Environmental Education Center）[6]

マンハッタンの対岸、ロングアイランドシティに位置するハンターズ・ポイント図書館は、クイーンズ公共図書館の中で最も新しい図書館である。明るい吹き抜けや階層構造、個性的な外観が特徴だが、設計段階では現場の図書館員を交えず、建築家と図書館本部によってデザイン性が重視されたため、障害者法や安全面への配慮、防音設備などにいくつかの課題が残った。そのため、設立当初からテラスやチルドレンズルームの一部は封鎖されたままとなっているが、問題が解消され次第開放する予定であるとのことだった。

最上階のティーンフロアは、マンハッタンを一望できる大きな窓がある最も眺めのよい空間で、人気の漫画コレクションを配置している。成人の利用は禁止となっており、ティーンの利用環境の保護が徹底されている。地域住民の半数程度が移民であることから、一般フロアでは多言語資料も配架され、日本語の実用書やフィクション（小説）も多く目に留まった。英語以外の言語資料の収集に際しては国籍ごとの住民数を考慮しており、「We speak your language.」をモットーに、各言語専門のスタッフを配置している。対応できない言語は電話での通訳サービス（75 か国語対応）を利用することもあり、言語多様性への配慮が行き届いている。英語以外の言語話者や幅広い年齢層に向けた無料プログラムを多数開催しており、特に若年層への教育に力を入れている様子が見受けられた。図書館に環境センターを併設し、環境保全に関するプログラムも実施している。

マンハッタンを一望できるティーンフロア

ティーンの利用環境を守るための注記

チルドレンズルームの階段部分は
安全面から封鎖され物置となっている

階段状に書架が配置された特徴的な構造
書架の背面は閲覧席になっている

ウェルビーイングや知育を目的として、複数の訪問先で
館内にジグソーパズルやボードゲーム等が設置されていた

[6] https://www.queenslibrary.org/（クイーンズ公共図書館）

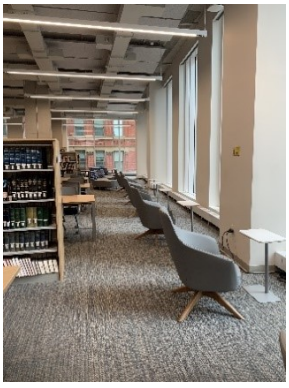
（3）ペース大学図書館（Pace University Library）[7]

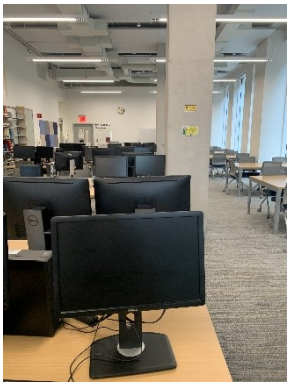
ペース大学はビジネス、コンピューターサイエンスなど実践を重視した職業志向の学部を持つ私立大学で、マンハッタンのビークマン図書館、プレザントビルのモートラ図書館、ホワイトプレインズのロースクール図書館の 3 つの図書館を設置している。

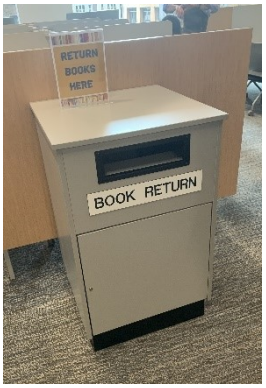
訪問したビークマン図書館は 2017 年に移転し、新館はラーニングコモンズや食堂、学生寮なども入るビル内に設置されている。マンハッタンという地価の高い立地のため、スペースや予算の制約が大きく、デザイン性よりも機能性や利便性を重視した設計となっている。旧館はアート系の制作スタジオ等、学生用のスペースとして利用されている。「ニューヨークで学びたい」という思いで入学する留学生が多く、学生の多様性や都市型キャンパスの立地を活かしたイベント（例：チャイナタウンツアー、ヒューマンライブラリー等）を開催している。スタッフルームは窓のない位置にあり、眺めのよいスペースは学生のために確保している。窓際のソファ型閲覧席や静かに学習できるサイレントエリア等、都会の喧騒を忘れて勉強できる環境が整えられている。

蔵書の半数以上は電子資料であり、冊子体の年間貸出数は約 3,000 件まで減少したとのことである。資料収集に際してはコストの低い媒体の購入を基本としつつ、蔵書構成や開講科目の特性も考慮している。冊子体資料として、ヴァージニア・ウルフ関連資料を集めた特別コレクション「The Linda Langham Virginia Woolf Collection」を見学した。デジタル面では、「デジタルコモンズ」[8]（機関リポジトリ）を運用し、教員や学生による出版物、論文などを保存・公開している（一部学内限定公開）。近年は ZINE[9]の収集や研究にも力を入れており、学生の ZINE もアーカイブ対象としている。生成 AI の活用については学部や専攻によって関心や課題意識が分かれており、全学的な運用には至っていないとのことである。

全体を通し、「ニューヨークで学ぶ場」としての誇りや、都市型キャンパスで快適に学習するための環境整備、利用者の多様なニーズに柔軟に対応する姿勢が印象的であった。


大きな窓に面したソファ席


PC を持ち歩かない学生も多く
デスクトップ端末も多く設置



スタッフを配置しないフロアには
返却ポストを設置

旧館は学生用スペースとして利用

コピー本から本格的な製本のものまで
多彩な ZINE コレクション

[7] https://libguides.pace.edu/newhomebuild

[8] https://digitalcommons.pace.edu/

[9]《magazine（雑誌）の略》雑誌。特に、少部数の自主制作雑誌。
出典："ジン【zine】", デジタル大辞泉, JapanKnowledge, https://japanknowledge.com , (参照 2025-08-25)

（4）ペンシルバニア大学図書館（Penn Libraries）[10]

フィラデルフィアに位置するペンシルベニア大学は、アイビー・リーグに名を連ねる、世界的に知られる名門私立大学である。蔵書は学内だけでなく、ニュージャージー州の遠隔書庫「LIBRA」[11]にも 200 万点以上収蔵している。館内には静寂な閲覧室をはじめ、図書館員の支援のもと研究ができるデジタルスカラシップエリア、セミナー室、グループ学習室の他、勉強の合間に利用できるエアロバイクやアナログゲーム、リラクゼーション用スペース等があり、ウェルビーイングへの配慮もなされている。

貴重書コレクションの主要収蔵場所であるキスラックセンター[12]では、大学創立時代に関連する展示や、多くの貴重資料を見学した。中でもヘンリー・チャールズ・リー図書室は、アーカイブ研究の授業等でも利用されおり、実際に貴重書を手に取ることができた。館内に大規模なコンサベーション（保存修復）・ラボもあり、自館で貴重書修復を行っている。保存修復専門スタッフは各々が学会に所属しており、知識や技術を常にアップデートしているとのことである。

資料の収集に際しては、サブジェクト・ライブラリアンによる研究者目線での選書に加え、学術計画への影響を考慮し、教員との協議も行っている。大学プログラムにも配慮しており、複数分野にまたがる資料の購入については各分野の専門家が相談して検討している。「グローバルコレクション」[13]は代表的なコレクションの一つで、幅広い分野にわたる 300 以上の言語と文字体系を網羅しており、日本の漫画が多く含まれる「東アジア漫画コレクション」[14]も見学した。電子リソースについては、コストや使い勝手、プラットフォームの永続性、バックファイルの範囲等を重視し、利用者層や可用性に基づいて選定している。医学系では電子媒体への切り替えに抵抗はないが、人文科学系の研究者は紙媒体を好む傾向があり、グローバルコレクションにおいては紙媒体でしか入手ができない資料も多いとのことである。

豊富な蔵書、最先端の設備、多様な専門人材を備えた教育・研究の総合的なサポートは、まさに世界最高峰の大学図書館であることを印象付けられた。

デジタルスカラシップエリア

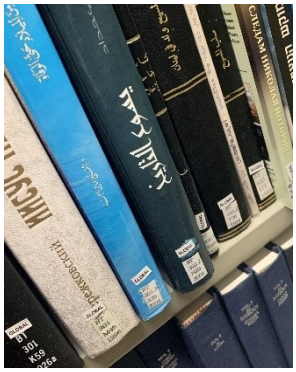
「Study Break GAMES」

植民地時代のコーヒーハウスを再現した展示室

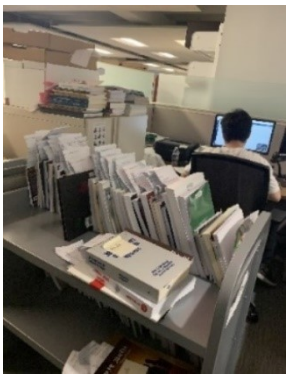
ヘンリー・チャールズ・リー図書室

[10] https://www.library.upenn.edu/
[11] https://www.library.upenn.edu/libra
[12] https://www.library.upenn.edu/kislak
[13] https://www.library.upenn.edu/zilberman
[14] https://www.library.upenn.edu/collections/notable/east-asia-comics-collection

コンサベーション・ラボの機材は可動式で、資料の形状に合わせて室内をレイアウトできる



300 以上の言語資料からなるグローバルコレクション



目録作成・装備等は図書館員とスタッフで分担作業している

国家歴史登録財に指定されているフィッシャー・ファインアーツ図書館

（5）ラトガース・ニュージャージー州立大学図書館（Rutgers University Libraries）[15]

国内有数の公立研究大学の一つであり、コレクション予算の 95%を電子リソースに投じる高度にデジタル化の進んだ図書館である。独自開発のオンラインツールやピックアップロッカーの導入により、媒体を問わず 24 時間資料へアクセスできる体制を整備している。電子リソースの活用が進む一方で、所在地であるニュージャージー州や大学の歴史に特化したコレクションも充実している。中でも「グリフィス・コレクション」[16]は、外国人留学生第一号であった福井藩士・日下部太郎ゆかりの資料が多く含まれ、明治期における日米交流の記録を伝える写真や日記、手紙、スクラップなどを閲覧した。

幅広いデジタルサービスを展開しており、リサーチデータサービスではデータ管理プランの提案やデータ検索方法に関するワークショップ、デジタルヒューマニティーズ分野では学際的な交流ができるワークショップ等を開催している。使用する資料はオンラインアクセスを可能とし、図書館員の他、専門知識をもつ大学院生を講師として雇用することで、開催回数を増やし支援体制を強化している。

健康科学図書館では、2015 年よりシステマティックレビューとスコーピングレビューの無償サービスとして、研究者と一緒にリサーチを行う「コラボレーション」と、アドバイスのみ行う「コンサルテーション」を提供していたが、コロナ禍以降ニーズが急増し図書館員に過大な負荷がかかる状況になったため、現状ではコンサルテーションのみ実施している。現在、AI を利用してサービスを効率化する方法を模索しているとのことである。

今回の訪問では、8 名の図書館員とのミーティングが中心となり、館内施設についてはデジタルラーニングコモンズ[17]のみの見学となった。ポッドキャストの収録ができるオーディオルームは特に人気が高く、ビデオ収録用のスタジオルームやプレゼンの練習ができる

---

[15] https://www.libraries.rutgers.edu/

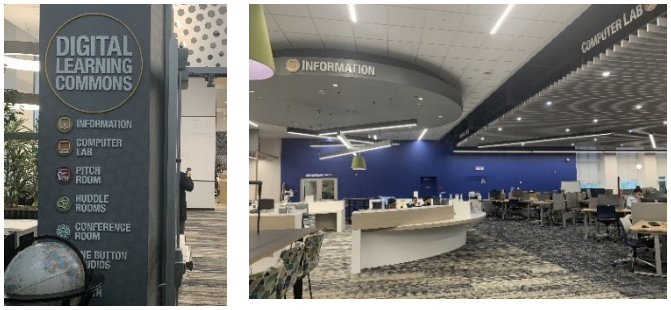
[16] https://www.libraries.rutgers.edu/new-brunswick/visit-study/locations/special-collections-university-archives/divisions-collections/manuscripts/william-elliot-griffis-collection

[17] https://www.libraries.rutgers.edu/new-brunswick/visit-study/locations/alexander-library/digital-learning-commons

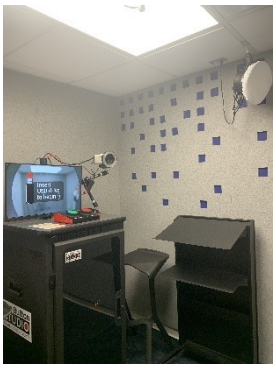
pitch ルーム等、最新機材を備えた個室が充実している。その他、レファレンスとヘルプデスク機能を備えたサービスデスクやコンピュータラボ等がある。

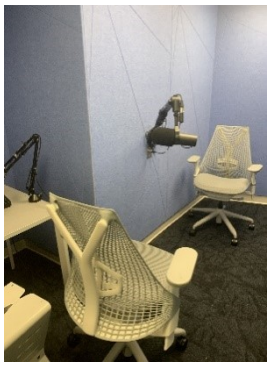
継続的な人材育成・学習を組織文化として重視しており、トレンドの積極的な導入や時代の変化に対する柔軟な対応に取り組んでいる様子がうかがえた。

紙媒体の他、兜や刀等も含むグリフィス・コレクション

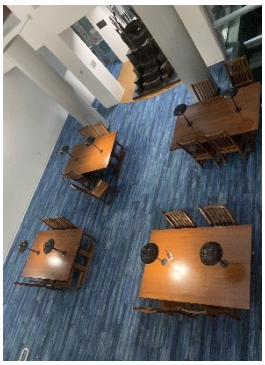


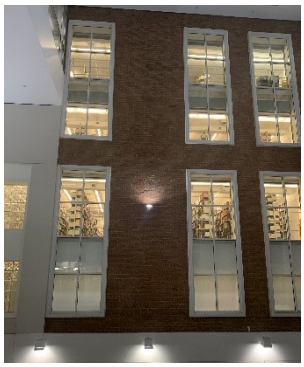
床の配色によりエリア分けされているデジタルラーニングコモンズ





学生からの人気が高いオーディオルーム・スタジオルーム





閲覧席や書架は遠景のみの見学となった

（6）ALA 年次総会特別セッション

John Hickok 氏（カリフォルニア州立大学図書館員）、Danilo M. Baylen 氏（ウェストジョージア大学教授）、Buenaventura (Ven) Basco 氏（セントラルフロリダ大学図書館員）の 3 名による特別セッションでは、AI の活用と学生対象のメディアリテラシー教育に関する参考教材[18]の紹介を交えた講義とミーティングが行われた。

講義では AI によって作られたフェイクニュースの見抜き方や、AI へのプロンプト入力例などが特に参考になった。米国の大学におけるメディアリテラシーの授業では、情報の正確性を精査するために 5 つの基準[19]からなる「CRAAP テスト」や、ファクトチェックツールが活用されている。教育研究現場において AI はすでに不可欠なツールとなっており、学生が正しい情報を見抜き、適切なプロンプトを使って分析、評価できるよう指導すること、また大学の契約資料と AI とを連携させる仕組みをつくることも図書館員に求められている。

---

[18] 紹介された参考教材の一例
https://guides.library.ucla.edu/educ466（掲載元：UCLA Library）
https://www.ala.org/acrl/publications/keeping_up_with/misinformation（掲載元：ALA）

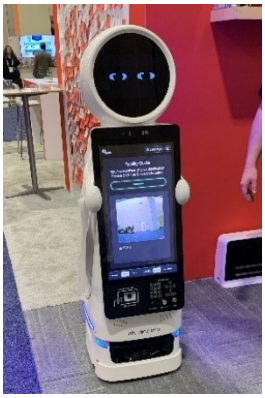
[19] CRAAP：Currency（最新性）、Relevance（関連性）、Authority（権威）、Accuracy（正確性）、Purpose（目的）

指導のための空間やコンテンツ構築においても、利用者ニーズを考慮した使いやすい仕組みづくりが必要とされている。米国図書館員の高度な専門性を改めて実感する内容であった。

特別セッションに加え、ALA 年次総会の会場では出版社や図書館サービス関係のブースを訪問した。主力となるアカデミックサービスのほか、児童・ティーン向け出版物の展示や、絵本をテーマとしたセッションには多くの来場者が集まり、賑わいを見せていた。また館内案内を行う AI ロボットやウェルビーイングに配慮した家具等、最先端の製品も数多く紹介されていた。会場内は原則として自由行動だったが、通訳付きのブースツアーを特別に企画していただいたことで、説明内容をより深く理解でき、有意義な時間を過ごすことができた。

＜ALA 年次総会 2025 会場風景＞

導入事例が増えているピックアップロッカー
ラトガース大学でも導入されている



館内誘導や貸出処理をする
表情豊かな AI ロボット

児童書のブースは特に賑やか

機能性を重視しつつもカラフルで個性的なデザインの図書館用品

4．考察・所感

今回の研修では、米国図書館の現場から多くの実践例を学ぶことができた。

① 収集資料媒体（冊子・電子・その他）の現状と将来の展望・方針

いずれの図書館でも電子資料の拡充が続いており、電子化やデジタルリソースの導入は今後も加速が予想されるが、冊子資料も依然として重要視されている。各館で地域や歴史に根ざした冊子体コレクションを所蔵しており、目的や利便性に応じて紙媒体と電子媒体とを適切に組み合わせている様子が見受けられた。また生成 AI の活用については、どの現場でも高い関心が寄せられていたものの、利用者向けサービスとしてはまだ確立されておらず、現段階では主に業務効率化を目的とした部分的な導入にとどまる事例が多かった。一方

で、大学内における AI リテラシー教育は着実に推進されていた。

② 多様性への取り組み

アメリカ社会ならではの移民文化への対応、多言語・多文化サービスがごく自然に提供されており、英語以外の言語や様々な背景を持つ人々が集える場づくり、障害のある利用者への配慮、若い世代を支援する体制も整っていると感じた。大学・公共を問わず、「多様性の受け入れ」を基盤とする姿勢は学ぶ点が多く、誰もが安心して利用できる環境づくりに日常的に取り組んでいる様子がうかがえた。

③ 図書館員の専門性および業務意欲の維持・向上のための取組

米国の図書館員は各分野の専門家であることを誇りとしており、多くが研究者、学会員として自己研鑽を続けている。人材育成への組織的投資を惜しまない姿勢が顕著であり、スキルアップのための費用が支給されているケースもある。またスタッフは単なるオペレーターではなく、専門職としてサービスの設計・運営をしている。大学図書館では、図書館員が教員や学生と積極的に協働し研究・授業に貢献している点も印象的であった。

今回の研修で訪問した図書館は、設備面でのトレンドや、多様性を基盤とした運営という点において、2024 年に訪問したオーストラリアの公共・大学図書館と多くの共通点が見受けられた。こうした背景には、多くの移民を受け入れてきた文化的要素が大きく影響していると考えられる。日本では多様性を受け入れるための社会基盤がいまだ発展途上にあり、教育の質をさらに高めるためにも、今後も積極的に情報を収集し、現場を見学・体験していくことが重要であると感じた。また蔵書構築や運営のための選択も、一過性の要因にとらわれるのではなく、日常的な問題と向き合いながら自ら学び続け、知識と判断力を磨いていくことが、図書館員の専門性を高める上で不可欠であることを改めて認識した。

参考文献：

田中あずさ著.『サブジェクト・ライブラリアン ：海の向こうアメリカの学術図書館の仕事』. 笠間書院, 2017 年.

Fredrick Wiseman [監督].『Ex Libris : The New York Public Library』[映像資料]. Pony Canyon, 2017 年.

＊本文内および脚注の参照先リンクは、2025 年 8 月現在の公開情報に基づき教育・研究目的で記載（すべて最終閲覧日 2025 年 8 月 27 日）

＊本報告書の写真はすべて報告者撮影